

“帝国愛国心” 対 “領土愛国心”
 —7年戦争以降のドイツにおける民族意識の高まり— (1)
 (著者: PD Dr. Wolfgang Burgdorf)

„Reichsnationalismus“ gegen „Territorialnationalismus“
 Phasen der Intensivierung des nationalen Bewußtseins in
 Deutschland seit dem Siebenjährigen Krieg
 (Autor: PD Dr. Wolfgang Burgdorf)

訳者: 鎌野多美子*
 (Übersetzerin: Prof. Tamiko Kamano)

この論文は、Dieter Langewiesche/Georg Schmidt 編集による『連邦国家－宗教改革から第一次世界大戦までのドイツ構想－*Föderative Nation – Deutschlandkonzepte von der Reformation bis zum Ersten Weltkrieg*－』（2000年ドイツ学術振興会助成出版物、出版社：Oldenbourg Wissenschaftsverlag GmbH）から抜粋（157～190頁）し、翻訳したものである。著者の Wolfgang Burgdorf は、現在ミュンヘン大学私講師（Privatdozent）、ドイツ近世史を専門としている。国際的な注目を浴び、現在ではドイツ法制史の標準的著作とされる *„Reichskonstitution und Nation. Verfassungsreformprojekte für das Heilige Römische Reich Deutscher Nation im politischen Schrifttum von 1648 bis 1806.“* (Mainz 1998) 以後、多数の論文を著している。

1806年8月6日に最後に選出されたローマ皇帝フランツ2世はウィーンにおいて神聖ローマ帝国の帝国法上の解体を公示した。1806年8月7日にゲーテはカールスバートからの旅行の帰りに、「使用人と御者が御者台で内部分裂しているほうが」旅行団を、「ローマ帝国の分裂より、興奮させた」¹と書いている。この文章は、神聖ローマ帝国の終りに言及する時は、必ずと言っていいほど引用される。その文章を本気で使用するなら、帝国は、ドイツの知識人とりわけゲーテにとっては特別な意味を持たなかったと推測される。

I

18世紀後半における、帝国をテーマにした討論は、しかしながら、そのような推測とは反対のことを言っていたように思える。1756年に発生した7年戦争の反響の中、帝国愛国心、即ち民族意識の新たな高揚が始まった。要するに“帝国愛国心は近世初期のドイツ人の民族意識だった”。² 近代的な意味でのドイツ人の民族意識の発展にとって、この時期

*かまの たみこ：大阪国際大学現代社会学部教授〈2011.10.3受理〉

は重要な意味をもっていた。革命戦争及び解放戦争の時代へと繋がる一連の年代が1792年から1815年であるという一般的解釈は拒否できる。“ドイツ人の民族国家の理念”の展開は、19世紀中頃、即ち1848年ないし49年の3月革命との関連において初めて認められるという主張も同じように退けることができる³。

ドイツには7年戦争以前に民族意識が存在していたことは疑う余地はない⁴。対オスマン帝国の戦争時と、対仏戦争時のパンフレットは、近世初期全般に存在したこの民族意識を証明している。30年戦争のジャーナリズムは、ルイ14世（在位1643-1715）に対抗する戦争の間、民族連帯を呼びかけるために、何度もパンフレットを供給した。またヴィーン宮廷は、新たにオーストリア王位継承戦争（1740-48）中、これらのパンフレットを用いて民族扇動を集中的に展開し、7年戦争中に使用されたプロイセンの反フランス宣伝の型板を、民族扇動活動を高揚させるためにも解放戦争が過ぎた時代まで供給した。タイトル、ペンネーム、そのうえ文面まるごとさえ、しばしば100年以上も繰返し使用された。その際、部分的に攻撃の矛先を変えた。例えば、オーストリア王位継承戦争では民族連帯を呼びかけてヴィーンから対プロイセンに仕掛けられたパンフレットは、諸侯同盟中には対オーストリアに仕掛けて新たに印刷された、或いはその逆も生じた⁵。さて、ドイツ国歌の中で繰り返される句“*Doiチュラント・ユーバー・アレス Deutschland über alles*”は、皇帝レオポルト1世（在位1658-1705）時代からの帝国重商主義のパンフレットのタイトルに源を発している⁶。フィリップ・ヴィルヘルム・フォン・ヘルニク（1640-1715）の有名な論文『*Österreich über alles, wann es nur will*』は、『*Teuschland über Frankreich, wenn es klug seyn will*』という論文を引き合いに出している。この二つの論文は1683年ないし84年に出版された。1798年には、元もとの構想を取り上げながらも、同時代の統計学に何度も取り上げられている、そしてプロイセンの中立を攻撃するフィリップ・フォン・ゲミンゲン（1800没）の10巻に及ぶ雑誌『*Teuschland über alles, wenn es nur will*』⁷が出版された。ホフマン・フォン・ファラースレーベン（1798-1874）が1841年に自分の作詞したドイツ人の歌に、ヨセフ・ハイドン（1732-1809）の1797年作曲のオーストリア皇帝賛歌“*神よ、皇帝フランツを守りたまえ*”の広く知られたメロディーを付けた時、全ドイツ人の愛国心と、オーストリア王家に関連する愛国心のあいだでの、二つの相反する価値を同時に含んだ反対感情並列は終わった。メロディーの利用は大成功を収め、その新しい歌詞と関連して、近代ドイツ人の民族意識の確固たる構成要素となった。

近代的意味での民族意識をもって、この点では、民族の政治的^{Nation}重要事項への行動的な参加を目指す意識のことを言っている。参加は、18世紀後半における当時の人々の合意において、体制に基づいた身分（階級）代表（制）によって、或いは公共メディアによって実現された。1795年の論文『*恒久平和のために Zum ewigen Friede*』の中で見られるイマヌエル・カント（1724-1804）の代表政府の構想は、体制に則した議会（民衆代表）なしでは、勿論ジャーナリズムなしでも生まれない⁸。

7年戦争によって誘発されたドイツ民族についての討議は、一方では神聖ローマ帝国におけるプロイセン-オーストリア二重主義のイデオロギーの敗北であり、他方では人文主義の古代継承以来ヨーロッパに導入された“民族の性格”を巡っての論議の部分であ

る。これは、つまりはテオプラストス（前371–前287）の性格描写に源を発している。近世初期の時代には、1575年のユアン・ファルテ（1530–92）の医学上の民族類型学が基礎付けになっている。それは1752年にゴットホルト・エビフラム・レッシング（1729–81）によってドイツ語に翻訳された⁹。レッシングのドイツ語訳は、当時の学術書としては比類なき成功を収め77版を出し、81ものタイトルでもって7ヶ国語に翻訳された¹⁰。アリストテレスから出発し、ファルテは、他の要素と並行して、気候が、人間の性格に影響を及ぼすという見解を主張した¹¹。スイス人のベート・ルートヴィヒ・ムラルト（1656–1749）は1727年に著書『イギリス人、フランス人、そして旅行について *Lettres sur les Anglais et les Francais et sur les Voyages*』でもって二つの民衆の性格を発表した。宮廷、流行、媚びには、イギリス人は肯定的、フランス人は否定的であると発表した。ムラルトの著書は1761年にドイツ語翻訳版で大成功を収めた。1752年にフランコイス・イングナス・デ・ラポルト（1707–77）の『民族の精神 *L'Esprit des Nations*』でもって、新たに気候論から出発する民族性格の類型が出版された。ファルテの著書に、結局はヨハン・カスパル・ラファーター（1741–1801）によって1772年から展開された人相学も、起因している。その人相学は後に人種学に拡充された¹²。ヴォルテール（1694–1778）は、『民族の風俗習慣と精神についてのエッセイ *Essai sur les moeurs et l'esprit des nations*』を書いて議論に加わった¹³。百科全書派、モンテスキュー（1689–1755）、ヴォルテール、ギッボン（1737–94）、そしてロベルソンは、不動の民族性格（気質）があるという見解だった¹⁴。それに対して、クラウデ・アドリエン・ヘルヴェティウ（1715–71）はこの考えを一蹴し、間違いとした。ダヴィト・フーム（1711–76）は民族性格の考えを、精神的“伝染病”と見なした¹⁵。民族の性格はあると確信していた著者たちは、気候から受ける一定した特定の影響によって、人間の性格にだけでなく、それは政治的体制にも影響を及ぼしている、と言いたい。この点で、祖国愛と民族自尊心は、各体制下および各領邦の大きさにおいても、等しく可能かどうかという疑問に結びつく。

正当な祖国愛は見通しの利く小さな共和国の中にだけ存在するという見解は、ギリシア都市国家の古代作家の報告およびローマ史の知識に基づいている。ルソー（1712–78）やヴォルテールのように¹⁶、スイス人医師であり学者であったヨハン・ゲオルク・ツィンマーマン（1728–95）は、この見解を共にし、それゆえ、特に荣誉と名誉は絶対君主の特別な印であると述べたモンテスキューに反対した。のちにツィンマーマンがいわゆる“スイス人の病気”を巡る医学上の議論に、翻訳しないままのフランス語で“^Hé^m ^m ^v ^e”として1765年に百科事典に採用されたホームシックという概念に関与したのは偶然ではなかった¹⁷。

ツィンマーマンは“空想した”根拠のない民族自尊心の類型学を展開し、その類型学と、客観的な行動に基づく民族自尊心の形を、区別した¹⁸。ツィンマーマンに反応して、プロイセンのフランクフルト・アン・デア・オーデルで教授をしていたトマス・アプト（1738–66）は、祖国への愛は君主国においても可能であると述べ、プロイセンの国家愛国心の基礎となるテキストをつくった¹⁹。しかし、またオーストリア人のヨセフ・フォン・ゾンネンフェルス（1732–1817）は、愛すべき君主国も存在するという見解だった²⁰。ヨーロッ

パの諸関係は、ここでは深く追求すべきではない。とはいえ、重要なことは、ドイツ人の愛国心についての議論²¹、同様に1763年以降の自身の民族のアイデンティティーについての議論－両者は交差しているが、完全に一致するものではない－は、ヨーロッパ議論の部分であるということである。ドイツ人の議論は、他国の学者たちが自身の民族の自己理解のためにであっても、「民族的なもの」を巡ってのヨーロッパ議論の部分として書かれた書物なしでは、理解できえない。その時その時の自身の民族の定義はヨーロッパの産物でもある。

18世紀後半三分の一におけるドイツ人の愛国心についての議論の手本役を果たしたのは、特にツィンマーマンの1758年に初めて出版された論文『民族自尊心について *Vom Nationalstolz*』、同様に1762年に生じたヘルヴェツィア協会創設の関連の中で出版された別の諸論文だった²²。ヘルヴェツィア協会は愛国心的統一体だった。そして、連帯精神を支援するため、また連帯精神によってスイス盟約団体の団結を支援するために、民族教育的な教育計画を宣伝した。

ドイツ人の、1756年以降のドイツ民族のアイデンティティーに関する集中的批判的な取り組みの動機は、第一に内戦として意識された7年戦争、そしてとりわけプロイセンの戦争宣伝活動だった。この宣伝活動は文書だけでなく、質と量においても、新しいレベルに達していた。同じようにタバコ缶の大量生産、綿布の大量生産²³、刺繍の大量生産、愛国的動機によるカレンダーの大量生産がでてきた事実、そしてまた、広く世に知られたメロディーを使用して、情報伝達の共同体的な効果を発揮する戦争歌が伝統的な戦争抒情詩と並んで出てきた事実には、プロイセンの自治体と住民を一体化する狙いがあった²⁴。これらの現象はアイデンティティーを樹立しながらも、同時に早くも互いのアイデンティティーを照らし合わせていたので、どっちつかずのものだった。それに加えて、国家の初の下僕としてのフリードリヒ2世の自己演出、－全体に対する彼の私利私欲のない貢献は、支配者と下臣との隔たりを解消したように見えた－同様にフリードリヒの宗教に対する寛容性、そして少なくとも理論上は反マキアベリーのな点で示されたフリードリヒの権力国家思想の拒否が加わった。一方で、同時にヨーロッパにおける大国の地位へのプロイセンの上昇は自尊心を惹き起こした。そのうえフリードリヒ2世の軍司令官としての驚くべき幸運から生じている魅力が加わった。また古い特定宗派への忠誠、つまり選帝侯領クーアブランデンブルクをプロテスタント信仰の優勢と擁護として解釈することは、効果を維持した。そのうえ宗派的な忠誠心はプロイセンの戦争ジャーナリズムによって露骨に言及された。パンフレットを書く多くの人々は、権力政治的葛藤、つまり神聖ローマ帝国内でのプロイセンとオーストリアの二重主義から生じた葛藤を、宗教戦争として、そしてそれゆえプロテスタンティズム擁護として描写することに努力した。すべてこれらは、市民知識層の一部にとっては、プロイセンと一体化するには十分な刺激になった²⁵。それはシモン・シャマ (1945-) によれば、民族というものを創案できる、かの文化的な諸行為にかかわることである²⁶。プロイセンは、7年戦争後、文化領域において、かの“批判的な大衆”を生んだ²⁷。批判的な大衆は民族のアイデンティティーを生み出すことに適していた。

これと同時に、既述したように、プロイセンの戦争ジャーナリズムは重要な意味を手に

入っていた。またこのジャーナリズムは質的、量的に新しい水準に達した。質的、量的に新水準に達したのは、ジャーナリズム論争が、期待された平和会議に直面して²⁸頂点を迎えた1761年に由来する。イギリスは、イギリスの戦争の諸目的を海外で広く達成した。フランスは戦争の結果、財政的崩壊の前に立った、それに加えて1761年2月6日にクレメンス・アウグスト（1700-61）、つまり五つの教会の君主であり、ケルンの選帝侯にして大司教であり、ミュンシュター、パーダーボルン、ヒルデスハイム、オスナブリュックの侯司教であり、同様にドイツ騎士団大団長だったクレメンス・アウグストが死去した。それによって北西ドイツの全ての「ゲルマニア・ザクラ」は空位になり、交渉次第で思い通りになるように見えた。これは、特にプロイセンの戦争目的のジャーナリズムを動機付けた。戦争目的のジャーナリズムは本質的には世俗を扇動することにあつた。

その最初のものとして、ここに30年戦争の、注釈付の、最も有名な、反皇帝的なパンフレットのドイツ語の翻訳版が挙げられる。反皇帝パンフレットとは、フィリップ・ボギスラヴ・フォン・ケムニッツ（1605-78）によってヒッポリトゥス・ア・ラピデというペンネームで、1640年に出版された『ディセルタチオ *Dissertatio*』のことである²⁹。そのドイツ語翻訳版には、プロイセン王の命令で、活発な議論にするために、しかしまたケムニッツとフリードリヒ2世の見解の矛盾を覆い隠すために、ヨハン・ハインリヒ・フォン・ユステイ（1717-71）による1,000ページの注釈が付けられた。詳細に言えば、ケムニッツはアリストテレスの中央集権国家を支持、一方でフリードリヒ2世は結局帝国解体を主張した。注釈によれば、^{Reichsverfassung}帝国の制度は、緩やかな^{Konventionälvfassung}連邦制の協定体制以外の何ものでもない。協定体制を守るか、守らないかは、一人ひとりの“主権を有する”帝国諸侯の気持次第である。それと同時に、反皇帝ジャーナリズムは根本的に新しい質をもつようになった。以前には一大危機にも、オーストリア王位継承戦争にも、帝国解体は一度も要求されなかった。如何に真剣にこの宣伝活動は考えられていたかは、後にフリードリヒ2世が自身でそれを裏付している³⁰。

二つ目として、ここで名を挙げることのできる著書はトマス・アプトの『祖国のための死について *Vom Tode für das Vaterland*』である。両方の著書は共に、王家に方向付けられたプロイセン人の領邦愛国心の帝国崩壊入門書と見なされていた。同時にアプトは古い帝国愛国心をも引っ張り出してきて、とは言え、帝国愛国心から帝國的要素を取り去り、それを、プロイセン君主への忠誠心を作り出すための道具として利用した。そのように、アプトはたとえばある詩の詩句によって、かつてローマ皇帝軍団に勝利した古ゲルマン人の名声を思い起こさせた³¹。彼はしかしながらその詩のタイトル“苦境におかれたドイツ *Das bedrängte Deutschland*”を沈黙し、同時にオーストリア王位継承戦争の歌詞との関係を沈黙した。同じように彼は帝国の絶え間のない内戦を悲しんだ言葉（歌詞）も引用しなかった。作家ヨハン・ペーター・ウズ（1720-96）が早くも1757年に公式に、人間を消耗させる戦争指揮者フリードリヒ2世の英雄化に反論したので、その詩句は扱いにくかった³²。この出来事は、18世紀後半において、タキトゥスへの関係が、神聖ローマ帝国と皇帝に関係ある総ドイツ人の愛国心の範囲内で、問題を孕んでいたことをも示している。いとも簡単にタキトゥス伝統は、反帝国および反皇帝へと方向転換された。

アプトの書物は、それ以上に、ドイツ人の血崇拜と土地（土壌）崇拜の原本だった。そのようなテーマは当時プロイセンだけに見られたものでないことも指摘されなければならない。エックハルト・ヘルムートは比較可能な現象をイギリスにおいて指摘した³³、またマルセイエーズの文言に至ってはなおさら、この文学常等文句が18世紀末に全ヨーロッパで広まっていたことを示している。アプトは自らの著書でもって、またドイツ人特有のかの母崇拜をも築いた。母崇拜の中で母性は将来の勇士を産むことができる、勇士はしかし祖国のための死によって初めて勇士となれる³⁴。アプトによって描かれた献身的な英雄像は、疾風怒濤時代に構想された天才像の愛国的擁護者であり³⁵、天才像には、再びユアン・ファルテとヨハン・ゲオルク・ツィンマーマンが本質的に関与していた。この二人については既に他の箇所でも言及している。ファルテの『天才の試験 *Examan de Ingenios*』（レッシング翻訳）は、啓蒙主義時代の天才についての議論のために出された重要なスペイン語寄稿論文だった³⁶。ツィンマーマンにとって、“天才”は、最も偉大な空想力と理解力の具現だった、アプトの英雄たちにおいては、祖国のための献身が具現と入れ代わる。

神を信じないトマス・アプトは啓示宗教を祖国の文化によって補填し、^{Diener der Religion} “宗教のしもべ”たちに祖国のための死を伝道することを要求した³⁷。これは実行された、そしてフリードリヒ・ニコライ（1733-1811）によって文学的に公表された³⁸。アプトのテキストは、世俗化の過程において“どのようにして政治的集団が世俗化し、永遠を期待する相続人になったか³⁹”を説明した。その点では、民族が宗教の位置に歩み出た時、ユダヤ教徒とキリスト教における息子の犠牲は、もはや神に対してではなく、祖国に対して要求されたのは、矛盾したことではなかった。祖国に対して生贄を捧げる準備は、アブラハムがイザックを殺すためにした準備に相当する、キリストの生贄としての死も同じである。

倫理的に価値ある、祖国のための死のモチーフを、アプトは古代の手本から借用した。エルンスト・カントロヴィチ（1895-1963）によって、中世の“プロ・パトリア・モリ”（祖国のために死ぬ）思想と指摘された古代の諸手本は、大部分はアプトからも引用されている⁴⁰。初期近世にも、祖国のために死ぬべしという要求は、知られていなかったことはない。それは個別には早くも30年戦争の戦争抒情詩の中に存在する⁴¹。18世紀中頃、そのモチーフはドイツびいきの吟唱詩人の文芸作品に取り入れられた。その作品は、反啓蒙主義的にもかかわらず、“吟唱詩人の流行”として、“教養ある観衆に確実に伝播”した⁴²。伝播した成功の理由は、伝播は広く知られた古代（文化や文芸作品）受容の一面であり、古代受容を民族一体化と結びつけることができたことにある。これはまた18世紀の二つの最初の偉大なヘルマン劇にも通用する、その作者たちはヨハン・エリアス・シュレーゲル（1719-49）とユストゥス・メーザー（1720-94）⁴³だった。彼らは、ウルリヒ・フォン・フッテン（1488-1523）のアルミニウス-ディアログ以降とくにプロテスタント化したドイツにおける祖国思想の構成要素だった複合モチーフを後世に伝えた。彼らのテーマは、プロテスタント化したドイツのために、現在の個別の葛藤要素を歴史的に観察し、自由になれる圧倒的勝利のビジョンと結びつくことのできる可能性を提供した。そのテーマの解説は、外敵、つまりフランスと教皇、同じように内敵、この場合においてはカトリックとローマ-ドイツ皇帝を、敵として方向づけることができた。ヘルマン諸劇は、読者と見物人に、攻

撃的で余所者に敵意を抱く、権力を強調する祖国思想を紹介した。それだけでなく、一般的には否定的評価を受けている愛国心の構成要素である熱狂は、今や肯定的な意味を手に入れた。シュレーゲルにおいては、ヘルマンを民族の英雄として認めたローマ人への憎悪は美德の一つになり、メーザーにおいては、復讐が、ローマ征服の計画が、最終場面の中心テーマになる。恐れられることは、ここでは“平和の支持”と“呪われた平和願望主義”だけである⁴⁴。

シュレーゲルとメーザーのヘルマン劇は、攻撃的なドイツ人の^{Nationalismus}民族主義の始まりとして解釈されていた⁴⁵。しかし、その際、ヘルマン劇の北ドイツ—プロテスタントの背景と、劇の発生した時代、オーストリア王位継承戦争は無視された。ヘルマン崇拜とプロテスタント特有の^{Nationalbewußtsein}民族意識の結びつきは、なお何十年か後、クロップシュトゥック (1724–1803) を賞賛するゲッティンガー・ハイン・ブントの誕生祭中に、世界主義者クリストフ・マルティン・ヴィーラント (1733–1813) の肖像画と著書の恐るべき焚書が生じた時、1773年7月2日に明らかになった。ヨハン・ハインリヒ・ホス (1751–1826) は、その日を祝うことを計画した。ドイツ人の連盟は偉大なドイツ人の一人を祝う祭りを、どのようにして、ヘルマン、ルター、そしてライプニッツ丸ごと祝ったのかといえば、クロップシュトゥックのオーデの朗読でもって始まり、ライン産ワインの乾杯でもって、クロップシュトゥックの健康、ルターの、そしてヘルマンの思い出とゲッティンガー・ハイン・ブントの健康を記念して乾杯をした⁴⁶。

『プロイセン—歩兵の戦争および勝利の歌 *Kriegs-und Siegeslieder von einem preußischen Grenadier*』⁴⁷の作者ヨハン・ヴィルヘルム・ルードヴィヒ・グライム (1719–1803) とアプトは、ヘルマン劇の作者とは違って、戦いと祖国のための犠牲死のイメージを具体的な当時の指導者像、つまりプロイセンのフリードリヒ2世に結びつけた。実際には祖国のために自由意志で死ぬイメージは、募集によって集まった傭兵の時代には決して適さなかった。現実とは反対の傭兵の描写を通して、美化された現実の分かりきったひずみがテーマだった。グライムとアプトはしかし、学識者たちがゲルマン人議論を継承するためには障害となるハードルを、このテーマでもって克服した。

一つは、グライムとアプトの著書でもって、ヘルマン諸劇の中で発展していった愛国心構想に共通していた。愛国心構想は分離主義かつ反皇帝であったと考えられる。決して全ドイツ人の民族意識の表現をテーマとしていない。フランスがプロイセンとではなく、オーストリアと結びついた時、古代ローマ人と当時のフランス人との同一視は、初めて強調された。神聖ローマ帝国没落の1806年より以前には、ヘルマン像は、現実的に民族のシンボルになることはできなかった。1808年にハインリヒ・フォン・クライスト (1777–1811) の『ヘルマンの戦い *Hermannsschlacht*』でもって、その後は、メーザー、グライム、アプト、そして他の人びとによって展開された敵を壊滅するという攻撃的幻想は、全ドイツ人の愛国心の一部となった。

アプトの1761年の著書は、プロイセン君主に対する無条件的忠誠を作り出すことだけに奉仕した。王の行為、王が導いた戦争が、法に適合するかどうか、或いは法を破るかどうかは、アプトには関心がない。それによって彼は、それまでは愛国的道徳性の中心的存在

に属し、帝国愛国心の中で居座り続けていた考えをはねつけた。この点で特にここにあげべきは、諸侯も法を守らなければならないというそれまでの考えもはねつけられたことである⁴⁸。18世紀のヘルマン諸劇、グライムの歩兵歌、そしてアプトの作品は、戦争の近代評価の転機になったという意味でも、近代ドイツ民族主義の基礎を形成した。30年戦争の詩的或いは文学的な反省が、戦争の恐ろしさによって刻印されていたとすれば、いまや戦争は肯定的に評価され、戦争への参加は賛美され、具体的な、流血的な戦争の出来事は美化され⁴⁹、色情さえ駆立てている。

それを具体化しているのが以下の若干例である。古代ローマ人は知らなかったのか—そのようにアプトは質問している—死の“喜びを。腹上死でなく、祖国を守るために差し出す死の喜びを⁵⁰”。最終的に我々の“血管から流れ出る血を、祖国を再び活発にさせるために、傷つきうめく祖国にたっぷりしみこませる死の喜びを。”ここでは、英雄の血は生命に捧げる液体である。何も克服されていない、アプトによれば、死への恐怖は、“天国の喜びへの”期待より以上に軽い⁵¹。

これらの喜びを、その時代に生きた未婚のアプトは、女性との親密な出会いとして優先して書き記している。北欧の王はかつて戦場で叫んだ、“なんとという未知の喜びが私をとりこにするのだろうか。私は死ぬのだ、オーディンの声が聞こえる、オーディンの宮殿のドアは開かれている”、“血の流れる敵の頭蓋に入った貴重な酒を”私に差し出す“半裸体の乙女たちが宮殿のドアからこちらへ出てくる⁵²”。また他の箇所では、イスラム教徒は交戦の興奮の中で仲間たちに、美しい乙女たち80人が見えると知らせている。その内のひとりが彼に食料を差し出し、そして呼び寄せた、“こちらへおいで、愛する人よ”。それに応えて、その戦闘者は言った、“そちらへ行こう、神の使いの乙女よ、神を信じない大群の中に突進する、私は死を食らわず、私自身死の一撃を食らう、そしてこの瞬間に汝（死）のもとにある⁵³”。同じようにアプトは、7世紀のイスラム教の作戦的拡大を肯定する第2代カリフのオマール（在位634-644）の言葉を引用している。オマールは自分の敵たちに、“お前たちが快楽を願っている時、お前たちと同様に死を望んでいる男たちを⁵⁴、お前たちのところに遣わす”と知らせた。アプトが言っているように、死の準備は、上に述べたような中で、“間違った諸宗教”への忠誠から生まれた。この認識の結果として、死の恐怖、不安に打勝つために、彼にとって“新手段の発見”の必要性が生じた。アプトは尋ねている、“祖国に対する愛よりも快適な策を見つけることができるであろうか。王に対する愛？この愛について言うことはできないのか、その愛は死より強いのか？⁵⁵”特に愛が真のキリスト教の聖職者によって力づけられるなら。フリードリヒ2世に関連するこのテキストは、ホラチウス（前65-前8）からの長い引用文、“欲望に満ち満ちて、祖国はお前に憧れている、われわれの意欲の王よ⁵⁶”で、終わっている。

男性愛の人トマス・アプト⁵⁷にとって、なぜ女性との性的満足感のイメージが死と結びついたのかは疑問である。しかし、より重要なことは、ここでは、このイメージの社会史的な文脈である。市民階級は宮廷と貴族の性的無秩序に対抗した。道徳性は完全に価値観の上層部に位置し、道徳性の貫徹は市民階級の上昇と結びついた。しかし、市民階級もまた性愛のオープンな描写を放棄できなかったと思われる。性愛は意識的あるいは無意識的に

変更された。ヨハン・ヨハヒム・ヴィンケルマン (1717-68) は性愛を、18世紀中頃に、市民階級の価値順位達成と並行して、古代芸術鑑賞の中に昇華した。明らかにバロックやロココの比喩のほかに、性愛は今や学問の保護下で姿を消した。トマス・アプトにおいては、男女の無礼講の性的ドンちゃん騒ぎの場面は、古代の受け入れと密接に結びついていた愛国心的議論の部分として再び見られる。それによって、アプトは、この愛国心的議論(伝達)が関係していたプロイセンの公共団体に予想外の魅力を与えた。

これは、アプトの著書の影響が、プロイセンの半公式の戦争ジャーナリズムの影響以上に大きくなった理由の一つである。それ以上に、それはヒッポリトゥスの著書と、無数にあるプロイセンの他の7年戦争の宣伝著書に比べて、それほど否定的でないという利点をもっていた⁵⁸。アプトの著書は、主として反皇帝、反帝国、反ゲルマニア・ザクラ、反聖職諸侯、そして反過激カトリック権力でなく、王の中に擬人化され、擬人化された王の姿で愛されるべきプロイセン祖国に味方するものだった。皇帝、神聖ローマ帝国、聖職諸侯、またカトリック勢力は全く表面に出てこなかった。これは、その書物に、20世紀に至るまで偉大な人気を博し、愛国心を力づけるために繰返し利用されるという、いくらか時代を超越したものを与えた。

II

アプトの作品は、帝国でなく、今にもプロイセンを最上位にしそうなくらいに魅力があったので、帝国にとっては非常に危険だった。30年戦争以降当然のようにドイツ人の帝国とドイツ帝国、つまりドイツ人の国家と見なされていた帝国は、帝国の精神的な錘を、民族的同一性の中に失うように思えた。このことと、既に記述したプロイセンの半公式の戦争ジャーナリズムの要求、つまり帝国解体或いは少なくとも帝国の性格を根本的に変えるという要求は、激しい逆反応、つまり帝国愛国心の新しい開花をもたらすこととなった。

さしあたり匿名で出版された『ドイツ人の民族精神について *Von dem deutschen Nationalgeist*』(1765)というタイトルの著書は、この反対運動の最高傑作だった⁵⁹。それは、それまで知らなかったドイツ世論の政治活動の動機となった。一反論著書の著者は、『ドイツ人の民族精神について』ほど、“世間一般に知られた”著書はかつてないと断言した。これまでの通例の国法学者だけでなく、一般市民と教会法学者、聖職者と世俗人、それどころか女性と宿屋の経営者までもが、“ドイツ人の民族精神について生じた議論について”語り合った⁶⁰。発生した議論は民族的な討論になり、その議論の中で優先的に、ドイツ人学者たちは、自分たちの民族のアイデンティティと根本的に取組んだ。

『ドイツ人の民族精神について』はドイツ人に、ドイツ人共通の言葉、文化、歴史、体制、そしてドイツ人を結びつけている自由の関心を思い起こさせた⁶¹。その作品の著者は、啓蒙主義の代表者、当時最も著名なジャーナリストのひとり、フリードリヒ・カール・フォン・モーザー (1723-98) だった⁶²。彼は帝国愛国心と領邦愛国心の間のイデオロギー的戦いでは、同一視の枠としての帝国に味方した。彼は、帝国に敵対的なパンフレットの著者たちを国事犯だとした⁶³。すでにその著書の一行目に、有無を言わせない文言「私たちは一つの^{Volk} (民衆) だ」の後に、モーザーは、^{Sprachnation}言語民族、^{Kulturnation}文化民族、過去を共有す

る共同体、そして帝国と関連する国家民族は分離しているのではなくて、共同で、ドイツ人のフォルクのアイデンティティーを保証する範囲を構成していると明言している。ただし彼は帝国の状況を鑑みて「私たちは“可能性の中では幸運な、現実には気の毒なフォルクである⁶⁴”と断言しなければならなかった。モーザーによれば、ドイツ人がフォルクとして生きのびようと思うなら、この状態を克服することが必要である。そのための一歩がナチオンN a t i o n（民族）に対する彼のアピールである。そのアピールより先にすでに、取戻された平和を帝国制度改革の構想のために役立てる、また諸侯領主を廃止するという、帝国議会議員への彼の訴えは先行していた。⁶⁵

モーザーは、体制上の重大な欠陥の克服のための手がかりを示さない帝国愛国心の形式から距離を置いた⁶⁶。体制上の欠陥を詳細に述べることなく、モーザーは、帝国議会での多数決によってもたらされる現実に即した改革措置を望んだ。そのことから、モーザーが特に少数派の帝国等族の自由な投票権を擁護することは理解できる⁶⁷。もちろん彼は一回切りの、包括的な改革行為を期待するのではなく、体制の“改革”は、体制が腐敗した時のように、ただゆっくりと意識変化を経由して手に入れることができると考えていた⁶⁸。体制改革のための提案を通してこのプロセスに参加するという要求によって、モーザーの帝国に関連する愛国心構想は、アプトとは反対に、はっきり認識できる要素を含んでいた。帝国の体制の改革についての議論に参加するというモーザーの要求は、帝国没落までしばしば繰返されただけでなく⁶⁹、何回も履行された⁷⁰。

メンタリティーを変化させるための最も重要な方法を、モーザーは青年教育の中に、特に皇太子教育の中に見てとった⁷¹。しかし大学教育もまた帝国愛国の意味において新たに構想（考案）されるべきだった⁷²。これは、改善は諸侯によってのみできるという意味を含んでいた、諸侯が能力のある若い男子たちをドイツ中に旅させるとすれば、彼らはドイツの部分を知ることができ、正しい概念でもって、また先入観を抜きにして国家の仕事に従事できる⁷³。若いカトリック教徒たちはカトリックの諸邦を知るだけでなく、ベルリン、ドレスデン、ハノーファー、或いはカッセル、北ドイツと東ドイツのプロテスタント、同様に軍事的には弱い、裕福な南西ドイツの領域を－その領域は帝国の体制がなお機能し、“民族精神の痕跡”が残っている－知ることができる。なりたての若い法律家はヴェッツラーとレーゲンスブルクへのみ出向くのではなく、宮廷の法見解についても調査した⁷⁴。モーザーは、（結果として対立文献をもたらした）宗派的不和の否定的な結果⁷⁵について、深刻に嘆いている。既に青少年の心には、その「正反対で有害な概念は、二重の祖国、つまりカトリック祖国とプロテスタント祖国によって」叩き込まれ⁷⁶、対立文献をもたらしたと深刻に嘆いている。モーザーの民族精神への訴えは、教会を信じるのと同様に祖国を信じるという要求において頂点に達した⁷⁷。この点では、モーザーはトマス・アプトと同じような道を進んだ。アプトは原始的の宗教の理解から出発し、無条件の献身、生贄としての死までを要求しているのにひきかえ、モーザーはこの点では明確に別のところを強調し、私たちの礼拝は理性的であらねばならないように、私たちの愛国心も同じようにあらねばならないということを要求した⁷⁸。“民族運動は－そしてこれが民族運動の影響力の重要部分を形成する－布教活動Nationalbewegungだった⁷⁹”。世俗化と民族意識の上昇は同時に進行し、民族主義は

キリスト教をこの過程において肖像学的、修辭的に受継いだ⁸⁰。キリスト教のように、民族主義は、ドイツにおいて、異なった諸宗派を形成したので、それらは、18世紀に帝国愛国心および領土愛国心と呼ばれた、したがってそれらは19世紀には大ドイツおよび小ドイツと名付けられた。

アプトの著書と同じように“民族精神”についてのその著書は、国法的或いは歴史的な調査でなく、政治的な宣言書だった。その目的は、帝国を、時流にかなった形式で復活させるというものだった⁸¹。モーザーの意図は、総ドイツ人の職務上のエリートに共通の教育背景と共有の“精神”、そして理解に満ちた実りの多い相互作用ならびに同一性の土台として、帝国の有利になるように奉仕することのできる“精神”を伝えることが目的だった。モーザーはプロイセン帝国主義に、“軍事的な行政形態”と、それに属する“盲目的従順の教え”でもって、アプトが説教したように、帝国における関係を対置した：“お前たちは屁理屈を並べてはならないという恐るべき言葉は、帝国法においては見出せない。帝国法はむしろ各ドイツ人の君主と家臣に、屁理屈を並べることを許可している、そしてこの優遇措置は、人間的な意志の自由とドイツ人の自由の中に、本質的に或いは初めから築かれている⁸²”。モーザーの見解では、この点で、帝国憲法はアメリカやフランスで宣言されるよりずっと以前に充分に人権を保障している。

著名な批評家たちはその作品を論評し⁸³、デンマーク大臣ベルンシュトッフとハノーファー大臣ミュンヒハウゼンはモーザーに祝辞を述べた、同様にフランクフルト在住の皇帝公使、ペルゲン伯 (1725-1814)、そして帝国副官房コロレド侯 (1706-88) は、賞賛することを止めなかった⁸⁴。しかし、地域分権主義の立場から、領邦愛国心の擁護者だった帝国等族の愛国者たちは、新たに声を上げた。彼らは帝国と民族の間に同一性があるということに疑念を抱いた。帝国の境界は、ドイツ言語民族の境界、ないし拡大したゲルマン民族群の境界とは一致していないからである。それどころか、ドイツ民族の^{Nation}実在と、その方面からのドイツ人の“民族精神”の可能性は否認された⁸⁵。領邦愛国者は、市民階級の確実な実在と発展の可能性を諸領土においてのみ認めようとした⁸⁶。この点では民族の様ざまな構想が対立し、言葉、ゲルマン人の民族群や帝国国境というように特定の視点を強調したあらゆる構想は、帝国内部における言語民族・文化民族・国家民族間の広範囲に及ぶ合致から出発しているモーザーの構想に対抗する立場におかれた。

それに対してモーザー、モーザーを支援する作家たち、そしてそれより以前のドイツ人のヒッポリトゥス版に対する反論書の著者は、帝国の制度のみが市民階級をドイツ人諸侯の絶対主義から守ることができる⁸⁷と強調した。これに関連してモーザーは、諸侯の絶対主義に余りにも屈服したということで、またそれによって自由を保障する帝国憲法の崩壊の共犯であると、ドイツ人の市民階級を非難した。彼は他の境遇にある市民階級を、ドイツ下院への召喚と結びつけた⁸⁸。従って、モーザーが近代ドイツの歴史学において絶えず“市民階級の同権運動のジャーナリズムの代弁者として”引き合いに出されるのは、驚くことではないように思える⁸⁹。

『ドイツ人の民族精神』が書かれたのは皇帝宮廷からの依頼による。宮廷がその作品を校正し、著者に金を支払った。1764年12月20日にオーバーライン・クライスの皇帝公使

だったヨハン・アントン・ペルゲン伯は、皇帝宮廷のためにモーザーを年間1,500グルデン—その後、金額は上昇—の年金で、スパイおよびジャーナリストとして召し抱えることに成功した⁹⁰。その行動の目的は、イデオロギーの宣伝レベルにおいてもそれまでになかった強さを発揮していた7年戦争の後のドイツ民族^{Nation}を、彼らの皇帝をかしらに、つまり皇帝ヨゼフ2世の下で統一するということにあった。ひとは固有の民族^{Nation}の概念、つまり帝国を崩壊させつつある、皇帝主権を弱体化させつつある反皇帝ジャーナリズムの影響を無力化することのできる⁹¹概念を呼び起そうとしたのである。その上、ヴィーンにおける公衆キャンペーンの準備は、間近に迫っている—1766年から1776年まで続く—帝国王室裁判所視察とのキャンペーンの密接な関係を暴露した⁹²。皇帝派政治を受け入れることへのジャーナリズムの同意にかかわる問題であった。皇帝派政治は制度に従っての可能性を利用しつくすことによって、皇帝の立場を強化することを目的としていた。ひとはそれを統合思想^{Nation}によって、達成することを望んでいた。統合思想の構成要素は、民族の首長としての皇帝と、民族の枠組としての帝国と並んで、帝国の非貴族住民にとっては権利の保護と自由の保護だった。皇帝と重要な皇帝顧問たちは、この計画を、帝国王室裁判所視察期間中に、全帝国住民にとって目に見える政治に移すことができると思っていた。したがって、1770年代後半に見られた“民族を力説することの弱まり⁹³”は、1776年の帝国王室裁判所視察の決定的な不成功と関係していると推測されたのは当然だった。視察の失敗によって、ヨゼフ2世の行政への就任以来持続していた愛国心の高揚、つまり若い皇帝の人びとによって鼓舞され、帝国の制度の改正を期待していた愛国心的高揚は最初に崩壊した。

したがって民族精神の議論は、さしあたり不成功に終わったが「民族—建設^{nation building⁹⁴}」の試みの一部である。スイス人手本の帝国への伝播は、とりわけ宮廷の制限された財政のために失敗した。皇帝ヨゼフ2世とヨゼフの最重要人物たちとの協議中は常に、軍に敵意を抱いているジャーナリスト、帝国等族に雇われているか或いは自由意志で帝国等族の熱心な支持者であるかのジャーナリストたちに直面していることが繰り返し強調されたのに、自分たちは何の策ももっていなかった⁹⁵。

モーザーは、一部は皇帝宮廷からの委託によって書いた諸著書、つまり帝国諸侯の統治要求に対抗する臣下の自由の代弁者としての著書、倫理的また宗教的な価値に結びついた政治の代表としての著書、しかしまたドイツ人の民族^{Nation}の統一体の擁護者としての著書によって、際立った特徴を得た。それによってモーザーの名前は、ライン同盟時代には、民族的統一を危険に晒した諸侯の主権要求に反対した作家たちのペンネームに用いられた⁹⁶。モーザーの民族精神の著書は、19世紀初期に至るまで、民族国家論争の基本的な推薦テキストとなった。

それにしてもプロイセンは民族^{Nationsbildung}の構築に成功しなかった。その理由は、その構想が首尾一貫していなかったことにある。1778年ないし79年のバイエルン王位継承危機の間と、対オーストリアおよび、バイエルンをオーストリア領オランダと交換しようとするヨゼフ2世の試みに対抗したドイツ諸侯同盟設立の1785年以降、プロイセンはドイツ人の一般大衆^{Öffentlichkeit}に対して、ドイツ人の自由の擁護者、ドイツ人の帝国の擁護者、そして帝国の制度の擁護者として練り上げた自己表現をした。これは、7年戦争中検討されていたようには⁹⁷ “プロ

イセンの^{Nation}民族国家” 或いは神聖ローマ帝国からのブランデンブルク—プロイセン分離の思想とは調和しなかった。首尾一貫して追跡されたのは、ドイツ二大勢力の権力政治的及び領土的争いの結果である1740年以降常時反皇帝という姿勢をもったプロイセンの権力政治だけである。

ツィンマーマン、アプト、そしてモーザーの著書というドイツ語で書かれた重要三テキストの、18世紀後半における民族的意識との関係を考察する時、古代継受が彼らに共通していたことが確認できる。もはや歴史を参照しない、専門家を参照しない、また註釈によって荷を重くしないという新スタイルも彼らに共通していた。それまでは、それらの手法は、古い論文のスタイルでは政治の重要事項の取り扱い時には普通一般に行われていた。ツィンマーマンの著書『愛国心の類型学 *eine Typologie des Patriotismus*』はどちらかといえば叙述的であるのに対して、アプトやモーザーのテキストは口述的な普通名詞的な性格を持っていた。モーザーのように、アプトもまた自分の手本をスイスで見つけた。論文作成後、アプトはツィンマーマンに「1759年に私はあなたの^{Nationalstolz}民族自尊心の著書を読み、自分が書きたいと思っていたような、ドイツ語で書かれた初めての模範例をそれに見出しました。翌年、私はその模範例に沿って、祖国のための死を書き、自分の力を試しました⁹⁸と手紙を書いた。モーザーは彼の立場で何回もそのスイスの手本を、つまりスイス盟約団体がヘルヴェツィア協会創設のために取り入れた愛国心的高揚を指摘した⁹⁹。

モーザーの著書は、—アプトには（モーザーと）比較できるほど明確には存在しない—自由の思想と参加の思想によって、帝国愛国心を新しい未来を指し示すレベルまで高めた。18世紀後半の帝国愛国心と、プロイセンの領土愛国心の対置は、一般的な見方を否定し、祖国のための死への個人的準備が政治的参加への許可に対するものと同等だった¹⁰⁰。君主の必要性、階級制組織の必要性、そして絶対的従属の必要性を強調したアプト、またプロイセンのために死ぬという準備を要求したアプトは、後に“愛国者は減多に自分の死によって祖国に役立つとしない”ので¹⁰¹ “祖国のために生きることについて書くべきである”と頼まれた。それに応えてアプトは『功績について *Vom Verdienst*』を書いた。しかし彼は新たに祖国のために死ぬという義務を強調した。そして特に自分の侯が不当で不必要な戦争を始めた時、敵はこの場合、もし敵が領邦から追払われない時は、残忍な復讐を取るであろうということ¹⁰²が待ち受けていると強調した。モーザーは帝国をそれとは反対に、考えられる政治的参加と市民の共同形成の自由を保障する枠組として絶えず描写した。またモーザーは市民に死を要求するつもりはまったくなかった。

(Endnotes)

¹ Johann Wolfgang Goethe, Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche, 40 Bde., II. Abt., Bd. 6 (33): Napoleonische Zeit, Briefe, Tagebücher und Gespräche vom 10. Mai 1805 bis 6. Juni 1816, T. I: Von Schillers Tod bis 1811, Frankfurt M. 1933, Tagebuch, 7. 8. 1806, S. 75.

² Georg Schmidt, „Wo Freiheit ist und Recht...“, da ist der Deutsche Untertan?, in: Matthias Werner (Hg.), Identität und Geschichte, Weimar 1997, S. 105-124, S. 118.

³ Heinz Angermeier, Deutschland zwischen Reichstradition und Nationalstaat.

Verfassungspolitische Konzeptionen und nationales Denken zwischen 1801 und 1815, in: ZRG GA 107, 1990, S. 19-101. Ders., Nationales Denken und Reichstradition am Ende des alten Reiches, in: Wilhelm Brauner (Hg.), Heiliges Römisches Reich und moderne Staatlichkeit, Frankfurt/M. 1993, S. 169-186. Zur Datierung zwischen 1789 und 1815 zuletzt Hans-Ulrich Wehler, Nationalismus und Nation in der Deutschen Geschichte, in: Helmut Berding (Hg.), Nationales Bewußtsein und kollektive Identität. Studien zur Entwicklung des kollektiven Bewußtseins, Frankfurt M. 1994, S. 163-175. Auch die Mehrzahl der Beiträge in: Ulrich Herrmann (Hg.), Volk-Nation-Vaterland, Hamburg 1996. Hier neben Wehler besonders Ernst Weber, Etienne François, Hans Jürgen Lüsebrinck, Heinrich Bosse. Hans Peter Herrmann, Einleitung, in: Ders. Hans Martin Blitz Susanna Moßmann (Hg.), Machtphantasie Deutschland. Nationalismus, Männlichkeit und Fremdenhaß im Vaterlandsdiskurs deutscher Schriftsteller des 18. Jahrhunderts, Frankfurt/M. 1996, S. 8. Wirkungsmächtig ist der erste Satz von Thomas Nipperdeyes „Deutscher Geschichte“ (München 1983) „Am Anfang war Napoleon“, ebd. S. 11. Der von Reinhart Koselleck mitverfaßte Artikel „Volk, Nation, Nationalismus, Masse“ in: Ders./Otto Brunner/Werner Conze (Hg.), Geschichtliche Grundbegriffe, Bd. 7, Stuttgart 1992, S. 141-431 erklärt das Phänomen des modernen nationalen Bewußtseins aus der Epoche der Revolution und der Befreiungskriege. Zu der Annahme der „moderne deutsche Nationalismus“ sei besonders auf Herder zurückzuführen: Otto Dann, Herder und die Deutsche Bewegung, in: Gerhard Sauder (Hg.), Johann Gottfriedrich Herder 1744-1803, Hamburg 1987, S. 308-340, S. 308, mit weiteren Literaturangaben. Dann vertritt die Auffassung, von einer nationalen Bewegung könne man „in Deutschland eigentlich erst ab 1806 sprechen“, ebd. S. 316, ähnlich S. 339f.

⁴ Wolfgang Hardtwig, Vom Elitebewußtsein zur Massenbewegung. Frühformen des Nationalismus in Deutschland 1500-1840, in: Ders., Nationalismus und Bürgerkultur Göttingen 1994, S. 34-54.

⁵ Z. B. : [Johann Jakob Schmauß,] Patriotischer Vorschlag zu einem Frieden zwischen Bayern und Oesterreich, wodurch nicht allein beyde Partheyen ihren besonderen Vorteil erreichen, sondern auch die Balance von Europa und die Sicherheit und Ruhe des Teutschen Reiches bevestigt wird. Eine die Vertauschung der Baierischen Lande beziehende sehr seltene Piece, o. O. neu aufgelegt im Jahre 1785 [1. Aufl. 1743].

⁶ Philipp Wilhelm von Hörnigk: Österreich über alles, wann es nur will [...]. Hörnigk bezog sich auf die Schrift „Teuschland über Frankreich, wenn es klug seyn will [...]“, beide Schriften erschienen 1683/4. Von Hörnigks Schrift sind 13 Auflagen bekannt-bezeichnenderweise auch aus den Jahren 1708, 1750 u. 1948, die Erinnerung an ihr Vorbild wachhielten.

⁷ [Philipp von Gemmingen,] Deutschland über alles, wenn es nur will! , o. O. 1798.

⁸ Immanuel Kant, Zum ewigen Frieden. Ein philosophischer Entwurf, Königsberg 1795 [ND Berlin 1995], 1. Artikel zum ewigen Frieden: „Die bürgerliche Verfassung in jedem Staat soll republikanisch sein“, Anhang 2. Artikel: „Alle auf das Recht anderer Menschen bezogene Handlungen, die sich nicht mit Publizität vertragen, sind unrecht“. Kant unterscheidet zwischen „republikanisch“ und „demokratisch“, in seinem Sinne kann auch eine Monarchie „republikanisch“ sein.

⁹ Juan Huarte, Prüfung der Köpfe zu den Wissenschaften. Übersetzt von Gotthold Ephraim Lessing, ND der Ausgabe Zerbst 1752, Einleitung und Bibliographie von Martin Franzbach, München 1968. Der Wittenberger Mathematikprofessor Johann Jakob Ebert gab eine revidierte und kommentierte zweite Auflage von Lessings Übersetzung heraus, schadete damit allerdings der weiteren Rezeption, ebd., S. LII.

¹⁰ Ebd., S. VII.

¹¹ Ebd., S. 154, 270, 401 u. 415.

- ¹² Johann Kaspar Lavater, *Von der Physiognomik*, Leipzig 1772. Ders., *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe*; 4 Bde., Leipzig 1775-78 [ND Zürich 1969].
- ¹³ *Euvres completes de Voltaire*, Bd. 16, Paris 1785. Dazu: Therese von Ladiges, *Herders Auffassung von Nation und Saat*, Diss. München 1922, S. 14.
- ¹⁴ Notker Hammerstein, *Heiliges Römisches Reich deutscher Nation und Europa*, in: August Buck (Hg.), *Der Europagedanke*, Tübingen 1992, S. 132-146, S. 142.
- ¹⁵ David Hume, *Vermischte Schriften*, T. 4, Hamburg und Leipzig 1756, S. 333.
- ¹⁶ Voltaire, 20 Artikel aus dem philosophischen Taschenwörterbuch, München 1985, Artikel „Vaterland“, S. 117.
- ¹⁷ Johann Georg Zimmermann, *Von der Erfahrung in der Arzneikunst*, Zürich 1764. Zur Übernahme des Begriffes „Heimweh“ s. ders., *Vom Nationalstolz*, Zürich 1980, S. 144 [Anmerkungen].
- ¹⁸ Johann Georg Zimmermann, *Vom Nationalstolz*, Zürich 1758.
- ¹⁹ Thomas Abbt, *Vom Tode für das Vaterland*, Frankfurt/O. 1761. Die am besten aufbereitete Edition des Textes findet sich in: Johannes Kunisch (Hg.), *Aufklärung und Kriegserfahrung. Klassische Zeitungen zum Siebenjährigen Krieg*, Frankfurt M. 1996, S. 589-650. Abbt hatte die Erstausgabe der Schrift Zimmermanns von 1758 gelesen, dieser wurde jedoch später ein Anhänger Friedrichs II. und änderte sein Buch entsprechend.
- ²⁰ Joseph von Sonnenfels, *Über die Liebe des Vaterlandes*, Wien 1771.
- ²¹ Rudolf Vierhaus, „Patriotismus“ – Begriff und Realität einer moralisch-politischen Haltung, in: Ders., *Deutschland im 18. Jahrhundert. Politische Verfassung, soziales Gefüge, geistige Bewegungen*, Göttingen 1987, S. 96-109.
- ²² Zimmermann, *Nationalstolz* (wie Anm. 17). Eine Aneinanderreihung „geschichtlicher und völkerpsychologischer Kenntnisse“, so Konrad Beste, der 1937 die Erstausgabe als Faksimiledruck herausgab, ders., *Einleitung zu: Zimmermann, Nationalstolz*, Braunschweig 1937, S. II (unpaginiert). Bereits in seinem ersten literarischen Versuch, dem „Leben des Herrn Haller“ von 1755 hatte Zimmermann gegen nationale Vorurteile gewandt, s. ders., *Nationalstolz* (wie Anm. 17), S. 144f. [Anmerkungen]. Zur Vorbildfunktion der Schweizer Debatte: Ernst Weber, *Patriotische Essays*, in: Jürgen Zichmann (Hg.), *Panorama der Friedricianische Zeit*, Bremen 1985, S. 221-223, S. 221.
- ²³ Horst Carl, *Okkupation und Regionalismus. Die Preußischen Westprovinzen im Siebenjährigen Krieg*, Mainz 1993, S. 367.
- ²⁴ Thomas Abbt äußerte später, „das erbauliche Lied, welches das preußische Heer auf dem Wege zum Angriff bei Lissa sang, war zehn Heldengedichte und auch eben so viele Bataillone wert.“ Ders., *Vom Verdienste*, ND Königstein/Ts 1978, S. 284. Martin Disselkamp, *Die Würdigung wahrer Verdienste. Aspekte eines ungelösten Problems bei Johann Joachim Winckelmann und Thomas Abbt*, in: *Germanische Monatsschrift N. F.* 43, 1993, = Bd. 74 der Gesamtreihe, S. 19-35, S. 28.
- ²⁵ Erns Weber, *Patriotische Essays*, S. 221.
- ²⁶ Simon Schama, *Überfluß und schöner Schein. Zur Kultur der Niederlande im Goldenen Zeitalter*, München 1988.
- ²⁷ Eckhart Hellmut, *Die „Wiedergeburt“ Friedrichs des Großen und der „Tod fürs Vaterland“*. Zum patriotischen Selbstverständnis in Preußen in zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts, in: Ders./Reinhard Stauber (Hg.) *Aufklärung 10* (1998), S. 23-54.
- ²⁸ Alois Schmid, *Der geplante Friedenkongreß zu Augsburg 1761*, in: Andreas Kraus (Hg.), *Land und Reich. Stamm und Nation. Probleme und Perspektiven bayerischer Geschichte. Festgabe für Max Spindler zum 90. Geburtstag*, Bd. 2. München 1984, S. 235-258.

- ²⁹ Philipp Bogislaus v. Chemnitz, Hippolithi a Lapide Abriß der Staats-Verfassung, Staats-Verhältniß, und Bedürfnis des Römischen Reichs Deutscher Nation: Nebst einer Anzeige der Mittel zur Wiederherstellung der Grund-Einrichtung und alten Freiheit nach dem bisherigen Verfall, Mainz 1761. Die Zeitgenossen hatten den Propagandakrieg deutlich wahrgenommen, [Johann Heinrich Eberhard], Freie Gedanken über einige der neusten Staat-Streitigkeiten, geschrieben im H. R. Reich Deutscher Nation, o. O. 1767, S. 8.
- ³⁰ Gustav Berthold Volz, Friedrichs des Großen Plan einer Losreißung Preußens von Deutschland, in: HZ 122, 1920, S. 267-277. Die Darstellung beruht auf den Testamenten Friedrichs II.
- ³¹ Abbt, Vom Tode (wie Anm. 19), S. 620f. u. 1000.
- ³² Hermann, Individuum und Staatsmacht: Preußisch-deutscher Nationalismus in Texten zum Siebenjährigen Krieg, in: Ders., Machtphantasie (wie Anm. 3), S. 66-79, S. 73.
- ³³ Hellmuth, Die „Wiedergeburt“ (wie Anm. 27).
- ³⁴ Abbt, Vom Tode (wie Anm. 19), S. 597, 610, 612. Zum Mutterkult ebd., S. 594, 595 u. 605.
- ³⁵ Die Herausstellung des Geniebegriffes findet sich erstmals in Zimmermanns „Betrachtungen über die Einsamkeit“ (1756), einer Vorstudie zu „Von der Erfahrung in der Arzneikunst“ (1764), in welcher der Geniebegriff weiter ausgearbeitet wurde. Zimmermann, Nationalstolz (wie Anm. 22), S. VIII.
- ³⁶ Juan Huarte, Prüfung (wie Anm. 9), S. XLIV.
- ³⁷ Abbt, Vom Tode (wie Anm. 19), S. 594.
- ³⁸ Friedrich Nicolai, Das Leben und die Meinungen des Herrn Magister Sebaldu Nothanker (1773-1776), ND in: Ders. Gesammelte Werke, hg. v. Bernhard Fabian Marie-Luise Spiekermann, Hildesheim 1988, S. 28-32.
- ³⁹ Dieter Langewiesche, Rez. zu: Peter Berghoff, Der Tod des politischen Kollektives. Politische Religion und das Sterben und Töten für Volk und Rasse, Berlin 1997, in: HZ 266, 1998, S. 120. Ganz passend notierte Gottfried Achenwall später unter dem Stichwort „Vom Tode für das Vaterland“ es sei von einem „patriotischen Priester“ geschrieben worden. Staats- und Universitätsarchiv Göttingen, Cod. Ms. Achenw. 191, Bl. 256. Ich danke Herrn Paul Streidel, M. A. für den Hinweis.
- ⁴⁰ Ernst H. Kantorowicz, Pro Patria Mori in Medieval Political Thought, in: The American Historical Review 56, 1951, 472-492.
- ⁴¹ Michael Weiser, „Teuschland, ach ja Teuschland.“ Politische Dichtung – erdichtete Politik. Patriotismus und Reichsvision in der Literatur des Dreißigjährigen Krieges. Hausarbeit zur Erlangung des Grades eines Magister Artium an der Ludwig-Maximilians-Universität München, München (masch.) 1998. S. 36.
- ⁴² Herrmann, Einleitung, in: Ders., Machtphantasie (wie Anm. 3), S. 28f.
- ⁴³ Schlegels „Hermann. Ein Trauerspiel“ entstand 1740/41 und wurde 1743 gedruckt, Möser „Arminius“ wurde 1749 veröffentlicht. Herrmann, „Ich bin fürs Vaterland zu sterben auch bereit.“ Patriotismus oder Nationalismus im 18. Jahrhundert? Lesenotizen zu den deutschen Arminiusdramen 1740-1808, in: Ders., Machtphantasie (wie Anm. 3), S. 32-65, S. 34. Die Gleichsetzung von Arminius mit Hermann erfolgte um 1530 im Wittenberger Kreis um Luther. Zur Rezeption des Mythos: Horst Callies, Arminius-Held der Deutschen, in: Günther Engelbrecht (Hg.), Ein Jahrhundert Hermannsdenkmal. 1875-1975, Detmold 1975, S. 33-42. Jacque Ridé, Arminius in der Schicht der deutschen Reformatoren, in: Rainer Wiegels/ Winfried Woesler (Hg.), Arminius und die Varus-Schlacht. Geschichte-Mythos-Literatur, Paderborn 1995, S. 239-248. Zur Popularität der Arminius-Opern im 18. Jahrhundert: Hermann, Arminius und die Erfindung der Männlichkeit im 18. Jahrhundert, in: Hermann, Machtphantasie (wie Anm. 3), S. 160-191, S. 162. Zum Germanendisurs des 18. Jahrhunderts:

- Klaus von See, *Deutsche Germanen-Ideologie vom Humanismus bis zur Gegenwart*, Frankfurt/M. 1970, S. 19-33. Harro Zimmermann, *Freiheit und Geschichte. F. G. Klopstock als historischer Denker*, Heidelberg 1987, S. 90-147.
- 44 Herrmann, "Ich bin" (wie Anm. 43), S. 35-37.
- 45 Ebd., S. 32-65.
- 46 Blitz, „Gieb Vater...“, in: Ebd., S. 80-122, S. 99. Johann Martin Millers Gedicht „An meine Freunde in Göttingen“: „Ihr, Freunde, seid noch Deutsche, wert des Landes, /Das Hermanns Schwert befreit, und Luthers Donnerwort/Vom Joche Roms befreit, und Klopstock sang“, zit. nach ebd., S. 118.
- 47 Erstmals 1758.
- 48 Herrmann, *Individuum* (wie Anm. 32), S. 76. Hans Erich Bödecker und Klaus Bohnen vertreten die schwer nachvollziehbare Auffassung, daß Abbt in dieser Schrift aufklärerische Positionen vertritt, was von Sahmland bestritten wird. Bödecker, *Thomas Abbt: Patriot, Bürger und bürgerliches Bewußtsein*, in: Rudolf Vierhaus (Hg.), *Bürger und Bürgerlichkeit im Zeitalter der Aufklärung*, Heidelberg 1981, S. 221-253. Bohnen, *Von den Anfängen des „Nationalsinns“*. Zur Literarischen Patriotismusdebatte im Umfeld des Siebenjährigen Krieges, in: Helmut Scheuer (Hg.), *Dichter und ihre Nation*, Frankfurt/M. 1993, S. 121-137. Irmtraut Sahmland, *Ein Weltbürger und seine Nation*. Christoph Martin Wieland, in: Ebd., S. 88-102.
- 49 Herrmann, *Individuum* (wie Anm. 32), S. 69.
- 50 Abbt, *Vom Tode* (wie Anm. 19), S. 610.
- 51 Ebd., S. 630.
- 52 Ebd., S. 630.
- 53 Ebd.
- 54 Ebd., S. 649.
- 55 Ebd., S. 631.
- 56 Ebd., S. 650. Es folgen noch einige Zeilen aus den „Carmina“.
- 57 Zu Abbts Homosexualität bzw., „Androphilie“ s. Wilhelm Ludwig Federlin, *Kirchliche Volksbildung und bürgerliche Gesellschaft. Studien zu Thomas Abbt, Alexander Gottlieb Baumgarten, Johann David Heilmann, Johann Gottfried Herder, Johann Georg Müller und Johannes von Müller*, Frankfurt/M. 1993, S. 30.
- 58 Ein großer Teil des preußischen Auftragsschrifttums ist leicht zugänglich. Reinhlod Koser (Bearb.), *Staatsschriften aus der Regierungszeit Friedrichs II.*, Bde. 1-2, hrg. v. Johann Gustav Droysen/Maximilian Drucker, Berlin 1877-1885. *Teutsche Kriegs=Canzley auf das Jahr 1756 bis 1763*: Bestehend in achtzehn Theilen, nebst einem Verzeichnis sämtlicher darinnen enthaltenen Pieçen und doppelten Register, Frankfurt 1757-1763. Neuaufgaben von Abbts Schrift gab es im 20. Jahrhundert bezeichnenderweise u. a. 1915 und 1935.
- 59 Friedrich Karl von Moser, *Von dem deutschen Nationalgeist*, 2. Aufl. Frankfurt/M. 1766 [ND Selb 1976].
- 60 [Eberhalrd.] *Gedanken* (wie Anm. 29), S. 14.
- 61 Moser, *Nationalgeist* (wie Anm. 59), S. 5.
- 62 Zu Moser (1723-1798) s. Bruno Renner, *Die nationalen Einigungsbestrebungen Friedrich Karl von Mosers 1765-1767*, Diss. Königsberg 1920. Hans-Heinrich Kaufmann, *Friedrich Karl von Moser als Politiker und Publizist*, Darmstadt 1931. Beide Monographien sind durch eine borussischen Perspektive geprägt. Helmut Rehder, *Fromme Politik: Zu den Essays von Friedrich Carl von Moser*, in: *Monatshefte. A Journal Devoted to the Study of German Language and Literature* 67, 1975, S. 425-431. Notker Hammerstein, *Das politische Denken Friedrich Carl von Mosers*, in: *HZ* 212, 1971, S. 316-338 sowie *ADB* 22, S. 764-782.
- 63 Moser, *Nationalgeist* (wie Anm. 59), S. 27.

- ⁶⁴ Ebd., S. 5f. .
- ⁶⁵ Ders., Neu-Jahr-Wunsch an den Reichs-Tag zu Regensburg, 1765, ND als: (Ein aufgewärmter alter) Neu-Jahrs-Wunsch an den Reichs-Tag zu Regensburg vom Jahre 1765, in: Neues Patrioticches Archiv für Deutschland I, 1792, S. 293-308.
- ⁶⁶ „Die besten begnügen sich, Deutschland vorzustellen, wie es sein sollte, gleich als ob dem Kranken mit der Beschreibung eines vollkommen gesunden Menschen [...] geholfen wäre“, Moser, Nationalgeist (wie Anm. 59), S. 13.
- ⁶⁷ Ebd., S. 23f. u. 32. Moser sah es jedoch schon für einen großen Gewinn an, wenn nur die bestehenden Reichsgesetze eingehalten würden, ebd.
- ⁶⁸ Ebd., S. 41.
- ⁶⁹ Z. B.: Kritik der deutschen Reichsverfassung, Bd. 1: Kritik der Regierungsform des Deutschen Reiches, Germanien 1796, S. V: „Der echte Patriot verschließt seine Augen nicht vor den Fehlern, die in der Verfassung seines Vaterlandes liegen; eben wegen seines Patriotismus, wünscht er diese Verfassung von ihren Mängeln gereinigt und zu den möglichen Grade der Vollkommenheit erhoben zu sehen.“ Ebd., S. 17: Es dürfe „nicht unberührt bleiben, daß jene Verfassung selbst noch bei weitem nicht in dem Stande der Vollkommenheit ist, die Zwecke des deutschen Reiches und seiner besonderen Staaten zu befördern geschickt wäre.“
- ⁷⁰ Wolfgang Burgdorf, Reichskonstitution und Nation. Verfassungsreformprojekte für das Heilige Römische Reich Deutscher Nation im Politischen Schrifttum von 1648 bis 1806, Mainz 1998. Ders., Imperial Reform and Visions of a European Constitution in Germany around 1800, in: History of European Ideas 19 (1994), S. 401-408.
- ⁷¹ Moser zitierte in diesem Sinne Friedrich II. und kommentierte süffisant: „Welch ein Zeugnis aus diesem Munde?“ Ders., Nationalgeist (wie Anm. 59), S. 42.
- ⁷² Er zitierte Gundling: „In Deutschland ist zwar vieles kontrovers, aber es geht alles wieder den Kaiser“, ebd., S. 15.
- ⁷³ Ebd., S. 48.
- ⁷⁴ Ebd., S. 47-52.
- ⁷⁵ Ebd., S. 17-20.
- ⁷⁶ Ebd., S. 19. Später trat Moser, in der Beantwortung der Preisfrage des Fuldaer Regierungspräsidenten von Bibra, wie die Verfassung der geistlichen Territorien zu bessern sei, für die Trennung von geistlicher und weltlicher Verfassung ein, Ders., Über die Regierung der geistlichen Staaten, Frankfurt/M. 1787.
- ⁷⁷ Moser, Nationalgeist, (wie Anm. 59), S. 41.
- ⁷⁸ [Friedrich Karl von Moser.] Was ist: gut Kayserlich, und: nicht gut Kayserlich? Zweyte verbesserte Auflage, gedruckt im Vaterland [Frankfurt/M.] 1766, S. 257. Auch diese Schrift war im Auftrage des kaiserlichen Hofes entstanden.
- ⁷⁹ Hagen Schulze, Der Weg zum Nationalstaat, München 1985, S. 7.
- ⁸⁰ Werner Busch, Das sentimentalische Bild. Die Krise der Kunst im 18. Jahrhundert und die Geburt der Moderne, München 1993, S. 58-64, über Benjamin Wests Darstellung „Tod des General Wolfe“.
- ⁸¹ Kaufmann, Moser (wie Anm. 62), S. 174. Der Vorwurf, daß Moser die Mängel der Reichsverfassung nur „durch eine alle Deutschen verbindende Vaterlandsliebe“ verdecken wollte, vernachlässigt Mosers Aufgabenbeschreibung für die Patrioten, vgl. ebd., S. 169.
- ⁸² [Moser.] Was ist: gut Kayserlich (wie Anm. 78), S. 273. Ders., Nationalgeist, 1766, S. 24.
- ⁸³ Kaufmann, Moser (wie Anm. 62), S. 125. John G. Gagliardo, Reich and Nation, Bloomington 1980, S. 57. Zusammenfassung der Kritiken bei Renner, Einigungsbestrebungen (wie Anm. 62), S. 44-63.
- ⁸⁴ Kaufmann, Moser (wie Anm. 62), S. 127.

- ⁸⁵ Friedrich Casimir Karl von Creuz, (Hg.), Versuch einer pragmatischen Geschichte von der merkwürdigen Zusammenkunft des deutschen Nationalgeistes und der politischen Kleinigkeiten auf dem Römer in Frankfurt nebst angehängten Anmerkungen, Gegenanmerkungen und Repliken sämtlich den berühmten Nationalgeist betreffend, Frankfurt/M. 1767, S. 4, 23f. u. öfter. Justus Möser, Allgemeine Deutsche Bibliothek 6, 1, 1768, S. 4.
- ⁸⁶ Johann August Eberhard, in: Allgemeine Deutsche Bibliothek 9, 1, 1769, S. 228-230.
- ⁸⁷ Moser, Nationalgeist (wie Anm. 59), S. 38 [Johann Friedrich von Troeltsch.] Unpartheyische Gedanken über die Anmerkungen des teutschen Hippolithus a Lapide, Cölln 1762, S. 5. [Ders.,] Fortgesetzte unpartheyische Gedanken über die Anmerkungen teutschen Hippolithus a Lapide, Cölln 1763. Ganz ähnlich: Kritik... (wie Anm. 69), S. 257.
- ⁸⁸ Friedrich Karl von Moser, Patriotische Briefe, Frankfurt/M. 1767, S. 62-64.
- ⁸⁹ Stellvertretend: Ursula A. J. Becher, Politische Gesellschaft. Studien zur Genese bürgerlicher Öffentlichkeit in Deutschland, Göttingen 1978, S. 13.
- ⁹⁰ Kaufmann, Moser (wie Anm. 62), S. 108-112. Dieser Zusammenhang ist von der späteren Forschung nicht gesehen worden. Vgl. Dann, Herder (wie Anm. 3), S. 316, 324f., 331 u. 326, S. 329 u. 330f.
- ⁹¹ Karl Otmav von Aretin, Kaiser Joseph II. Und die Reichskammergerichtsvisitation 1766-1776, in: ZNRG 13, 1991, S. 129-144.
- ⁹² „21 Fragepunkte Kaiser Josephs II. zum künftigen System der Reichspolitik“, vom 12. und 30. November 1766, in: Johann Josef fürst von Khevenhüller-Metsch, Aus der Zeit Maria Theresias. Tagebuch des Fürsten Johann Josef Khevenhüller-Metsch 1742-1778, hg. v. Hanns Schlitter, Bd. 6: 1764-1767, Wien 1917, S. 479-482. Colloredo, der Reichsvizekanzler, antwortete am 12. November, ebd., S.482-502. Kaunitz, der österreichische Staatskanzler, am 30. November, ebd., S. 502-518. Zu dem Gutachten Pergens s. Haus von Voltolini, Eine Denkschrift des Grafen Johann Anton Pergen über die Bedeutung der römischen Kaiserkrone für das Haus Österreich, in: Gesamtdeutsche Vergangenheit. FG für Heinrich Ritter von Srbik zum 60. Geburtstag am 10. November 1938, München 1938, S. 152-168.
- ⁹³ Dann, Herder (wie Anm. 3), S. 331.
- ⁹⁴ Damit sollen andere Erklärungsmodelle für das Entstehen eines qualitativ neuen nationalen Bewußtseins nicht bestritten, sondern nur ergänzt werden. Wichtig sind die Modelle von Schulin (Identitätssuche nach dem Verfall der feudalen Gesellschaft), Gellner (Übergang zur Industriegesellschaft), Winkler (Religionsersatz), Herrmann (Verbindung von gesellschaftlichen und persönlichen Umbruchssituationen; Individualisierung, Universitäts- und Nachuniversitätszeit), s. Ernst Schulin, Weltbürgertum und deutscher Volksgeist. Die romantische Nationalisierung im frühen 19. Jahrhundert, in: Bernd Martin (Hg.), Deutschland in Europa. Ein historischer Rückblick, München 1992, S. 105-125. Ernest Gellner, Nationalismus und Moderne, Berlin 1991. Heinrich August Winkler, Nationalismus und seine Funktionen, in: Ders., Nationalismus, Königstein/Ts. 1978. S. 5-48. Herrmann, Einleitung (wie Anm. 42), S. 21. Ders., Individuum und Staatsmacht. Preußisch-deutscher Nationalismus in Texten zum Siebenjährigen Krieg, in: Ebd., S. 66-79.
- ⁹⁵ Kaunitz und Colloredos Beantwortung der „21Fragepunkte Kaiser Josephs II. zum künftigen System der Reichspolitik“, vom 12. und 30. November 1766, in: Khevenhüller-Metsch, Tagebuch (wie Anm. 92), Bd. 6, S. 481, 11. Frage: „Wie leicht mit einem mäßigen Aufwand einige geschickte Schriftsteller unter denen Protestanten selbst zu gewinnen sein werden, um die der Anständigkeit des kais. Hofes gemäße (...) Principia zu verbreiten“, die falschen Lehren der meisten protestantischen Publizisten „in ihrer ganzen Ungereimtheit darzustellen, dargegen aber bei beiden Religionsteilen das Vertrauen und den dermaligen

wahren Enthusiasmus gegen ihre kais. M. geheiligte Person und gegen das friedfertige billige und gemäßigte System des hiesigen Hofes immer tiefer zu machen“. Die Fragen ebd., S. 479-482. Zu dem Gutachten Pergens Voltelini, Denkschrift (wie Anm. 92), S. 152-168. Im Zuge der Beratungen wurde dem Kaiser mitgeteilt, daß man bereits ganz in seinem Sinne verfahren sei und Moser engagiert habe.

⁹⁶ Friedrich Carl von Moser's Sendschreiben d. d. Abrahamschooß im Juni p. chr. n. 1807 an Herrn Joseph Zintel, der Weltweisheit Dr., beider Rechte Lizentiaten und königlich oberbayerischen Hofgerichts-Advokaten, dann an Herrn Joh. Nik. Friedrich Brauer, beider Rechte Dr., Großherzoglich badischen geheimen Rath, in: Der Rheinische Bund 3, 8. 1807, S. 286-295. Friedrich Carl von Moser's zweites Sendschreiben d. d. Abrahamschooß im August 1807 an den Herrn Geheimen-Rath Brauer zu Carlsruhe, in: Ebd., 4, 11, 1807, S. 161-189. Danksagung eines mediatisierten deutschen Reichsstandes an Friedrich Carl Moser nebst dessen Antwort, in: Ebd., 5, 15, 1808, S. 402-411. Gerhard Schuck, Rheinbundpatriotismus und politische Öffentlichkeit zwischen Aufklärung und Frühliberalismus. Kontinuitätsdenken und Diskontinuitätserfahrung in den Staatsrecht- und Verfassungsdebatten der Rheinbundpublizistik, Stuttgart 1994, S. 248f.

⁹⁷ Volz, Friedrichs des Großen Plan (wie Anm. 30).

⁹⁸ Zit. nach: Kunisch, Aufklärung (wie Anm. 19), S. 975.

⁹⁹ Bereits das zur Einheit mahnende Motto der Schrift war ein Zitat von Iselin. Weitere Verweise, Moser, Nationalgeist (wie Anm. 59), S. 46, 55u. 56.

¹⁰⁰ Berghoff; Tod (wie Anm. 39). Jörg Echternkamp, Der Aufstieg des deutschen Nationalismus (1770-1840), Frankfurt/M. 1998. Echternkamp hat die Bedeutung der Nationalgeistdebatte nicht erkannt, da er sie nur über die ablehnende Rezension Justus Möser's zur Kenntnis nimmt, ebd., S. 55. Auch die Ansicht, der Fürstenbund habe „auch außerhalb Preußens ein Gefühl der Gemeinsamkeit der Reichsbürger“ ausgelöst, widerspricht den Quellen, ebd., S. 84.

¹⁰¹ Friedrich Nicolai, Ehrengedächtniß Herrn Thomas Abbt. An Herrn D [r]. Johann Georg Zimmermann, Berlin und Stettin 1767, S. 16f.

¹⁰² Thomas Abbt, Vom Verdienste, Wien 1804, S. 272. Davon abgesehen entfaltete Abbt in dieser Schrift den gesamten patriotischen Tugendkanton der Aufklärung.